

これからの図書館を考えるために

2007年12月3日(月) 15:30~18:00
2007年度JLA中堅職員ステップアップ研修1
日本図書館協会・研修室

竹内 哲
(たけうち, さとる)
日本図書館協会顧問

0. はじめに

今日の話は、すぐに役に立つというものではありません。迂遠な話です。

今、図書館の冬の時代：

- ① どここの国も、自治体の首長や議員が図書館のことを知らないという悩みは共通
- ② 英国の The Children Act, 2004 の大きな視野 ⇒ 学校、図書館、地域の団体、医療機関、警察など、子どもにかかわる機関全てに共通の目標を設定
 - (1) 健康な生活
 - (2) 安全な生活環境と地域の品位を維持
 - (3) 静かな満足感と達成感
 - (4) 社会への積極的参加
 - (5) 経済的自立の達成と地球環境の保全
- ③ 図書館と宇宙とのかかわり
 - (1) 50億年後、地球が消滅する時に、人間は図書館を宇宙に運ぶ。⇒人間とは、過去に学び、現在を考え、未来を設計する動物だから(小生の持論)
 - (2) 今、すでに火星には図書館が到着、また、漢字と仮名とを刻んだ衛星「かぐや」が月を周回。小惑星イトカワには協力者の名を刻んだ銘盤が打ち込まれた。
 - (3) 図書館は「知の宇宙」。それぞれの図書館は地球を囲む「知の星座」。
- ④ 図書館の春を、どうしたら招きよせることができるか。
⇒ ここ半世紀の間の最大の変化：市民の公立図書館・学校図書館への強い関心と努力。

1. 当面の問題

1-1 皆さんの問題意識

1-2 危機の時代：(アメリカの教育哲学者、1859-1932) の考え方

生物と無生物との間の最も著しい差異は、生物が更新によって自己を維持することである。… 生物は圧倒的な力によってたやすく押しつぶされるかも知れないが、それでも生物は自己に作用するエネルギーを自己の存続の手段へと変えようとする。それができなければ、生物は(すくなくとも高等な生物においては)壊れて小さな破片になるだけでなく、もはやある特定の生物ではなくなってしまうのである。

生物は、生存しているかぎり、自己自身のために周囲のエネルギーを利用しようと努める。… 生物とは、自己を圧殺してしまうことになりかねないエネルギーを、かえって自己自身の活動の持続のために、征服し、制御するものなのである。生活とは、環境への働きかけを通して、自己を更新してゆく過程なのである。

([ジョン]・デューイ著 『民主主義と教育』上、松野安男訳 岩浪文庫 2002 p. 11~12)

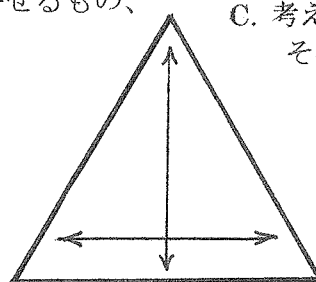
1-3 その力をどう養うか

① 安定した時代に見られる文明の開花 ⇒ その前の動乱期に用意されたか
もしそうだとすれば、今こそ次の時代の発展を準備すべきとき。

② それは『人』がすること。次の時代は呼び寄せるもの、

③ 『人』がすることとは、

- (1) 自分の殻を破ること：自己研修
- (2) 職員集団としての充実を図ること：
図書館を多様な切り口と、構造
- (3) 他の職種からの刺激 ⇒ 別紙2枚
- (4) 私の夢：JLA 学校 ⇒ 講師も
受講生も自分の意思と手弁当で



A. 考える人

B. 今までとは違う考え

2. 今までの自分からの出発

2-1 自分が持っているものを基礎として、その上に図書館員としての自分を築く

⇒ そこでぶつかる問題：自分というものの殻を破ること

- ① 中学生の時に知ったことば：愚公移山。漱石の『猫』の中に出てくる『蒙求』という本を読みたいと思った ⇒ 古書店で見つける。
- ② 比較という考え方に触れる。「日本人は、日本語のできる中国人を見ると、すぐに自分たちと同じ考えを持つ、と考える。それは違う。それぞれの民族の考え方というものがある」。金井章（蒙疆政府最高顧問）の著書から。
- ③ 加藤宗厚先生の教え：できることを、できるようにやりたまえ。
- ④ 松崎慊堂（江戸末期の学者）：目標に向かって、横道に逸れないように。

2-2 無理に破った殻、破らされた殻、思いがけず破れた殻

- ① 加藤先生：「君、留学生試験を受けたまえ」 ⇒ 1960 ⇒ 落第を繰り返す
やっと合格、フロリダ州立大学の Louis Shores 博士の許へ、1964 年
- ② 博士課程への留学：1972 年
- ③ Pittsburgh 大学の Interdisciplinary Curriculum と Educational Anthropology
- ④ 文庫活動への参加 ⇒ 公立図書館に吸収されるべきものという考え（アメリカの social libraries の例から） ⇒ 図書館の原初的形態という理解
- ⑤ 『ちびくろサンボ』の問題 ⇒ 一つの民族が社会的地位を獲得してゆく過程。
- ⑥ Early Book Paths as Preface to Library Cooperation 執筆のために

2-3 図書館のことを考えるために

① 図書館学（図書館情報学）とはどんな学問なのか

⇒ 人間という存在を明らかにするため。人間は常に情報を求め、知識を組織して来た。なぜそうなのか。そういう人間はこれからどう生きるか。その特質をどう育てるか ⇒ 人間存在に関わる点で、全ての学問と共通の目的を持つ。

② 司書課程の科目は、図書館学の入り口

⇒ 各科目の相互の関係をとらえることで、自分の見方の展開を図る。

⇒ 資料論を基礎とし、資料の物理的形態と人名の類型や書名の把握に目録法を、資料内容の分析と総合とに分類法、件名目録法を、それらの総合の上に参考業務を考えることで、体系的な理解が生れる。

③ 館種別の相違と共通性：相違の理解とともに、共通点の認識の共有が必要。
専門図書館は研究者の情報要求とその解決法を追求において、他の館種にモデルを提供する。学校図書館は、年齢層と関心の特化において、大学図書館は学術の研究と教育の支援において、公共図書館はその地域で生きる人のために働く多様なサービスにおいて、他の館種と密接に連携する。

④ 図書館学は今後ますます専門分化する。

⇒ 「図書館は人が生きるためにある」ということを、共通の基盤に。

⑤ そう考える理由：敗戦 ⇒ 一切が崩れた。庶民はその日から自分の生活を立てるために働いた。それとともに、不確かな情報や知識に動かされやすかった。そのために生命を失う人さえあった。それは庶民の逞しさと脆弱性との現れであった。その体験から 30 年ほど後に、「人が生きるための図書館」という考え方が徐々に生れた。教育人類学と文庫活動に支えられた。。

3. 図書館員としての、集団での研修

3-1 過去への反省：Andrew D. Osborn の “Crisis in Cataloging.” 1941.

- ① The Legalist Theory
- ② Perfectionism
- ③ Bibliographic Cataloging
- ④ Pragmatic Theory

3-2 集団の持つ宿命 ⇒ 図書館界はこれをどう乗り越えるか

- ① テクノクラート化 ⇒ 技術偏重
- ② 官僚化 ⇒ 硬直化。組織の維持が先になって、目的を忘れる
- ③ 組織のなかで安住 ⇒ 腐敗。その後は？

3-3 図書館をみんなで検討するための手がかり

① 相互作用 [交互作用] と意思決定 (Interaction と Decision making)
⇒ 二つまたは二つ以上の事物が互いに他に対して作用を及ぼしあうこと

② その用例：

哲学、社会学、社会心理学 ⇒ ベールズの相互作用過程分析のカテゴリー
社会言語学、素粒子論研究

歴史学：E. H. Carr の言葉：歴史とは、歴史家と事実の間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのである。

県立図書館からの発言：県立図書館の活動は、利用者、職員、沖縄県及び教育委員会、他の図書館、各種の団体、関連企業、ボランティアなど様々な

関係者の相互作用で成立しています。(又吉賢一 「県立図書館を巡る状況について」『沖縄県図書館協会誌』第10号 2006 p.11)

③ Carr の言葉からの一つの試み：図書館とは、図書館員、図書館資料、図書館の利用者、及び図書館に関わる力（行政、議会、出版、流通を含む）の間の不断の過程である。

④ この考えについての疑問

- (1) 図書館資料は無生物であって、相互作用の主体たり得るか
- (2) 図書館資料は、利用者の読み方によってその意味内容が変化する。
- (3) 図書館資料は、それ自身の寿命を持ち、その延命は図書館の関心事である。

⑤ 利用者と図書館との間の相互作用と意思決定の一例（アメリカで竹内の調査）

- (1) 調査対象：61歳、男性、退職した建設技術者。義務教育（4年）修了後建設業の見習いとなり、職人から親方となる。教育委員会の営繕主任となり、教師との対話ができず、自分の無知を自覚。そのころ一人娘が学校に入り、読書に興味を示さず、父親の悩みの種となる。学校に相談にいったら、司書教諭から、“**Do you read?**”といわれ、親子読書が始まる。娘は勉強に興味を持って大学院を卒業、自分も読書家、蔵書家となる。しかし、図書館は暗くいかめしいところで、自分の読書とは関係がない、と思っていた。

- (2) 退職後、図書館に行く。新任の図書館長に会う。 [館長]
- (3) 建物の入りやすさ：スーパーマーケットの建物を利用。 [建物]
- (4) さまざまな図書館資料 [資料]
- (5) 図書館員の態度 [職員]
- (6) 図書館の行事や営繕への助言 [参加]
- (7) 他の利用者および図書館との関係 [自分の位置の確認]
- (8) 図書館を中心とする活動への参加 [意思決定と経験の分け合い]

⑥ 日本の受験生の図書館利用に、相互作用は認められないか？

⇒ 受験生が図書館に求めるものは何か。

- (1) 自宅や学校図書館とは異なる環境 ⇒ 特別な意識 [非日常的空間]
- (2) 名を知らない、しかしライバルたり得る存在がいること [競争の意識]
- (3) 物理的環境の利用（空調、参考書、広い机など） [快適さ]
- (4) 図書館の対応：図書館の都合で割り切っていないだろうか？ これについてどんな風に考えたらよいだろうか？

- 1) 理想：他の分野とも共有できる目標：人間行動の記録の共有。
- 2) 理念：図書館の基本的な考え：資料提供によって自立を援助する。
- 3) 政策：設置母体との関わりで生れる運営の方向。
- 4) 方針とそれに基づく活動：政策の具体化。
- 5) 仕来り：図書館にとっていちばん簡単で、利用者に分かりにくい対応。

4. 日図協学校

4-1 『日本図書館協会』を書いていて考えたこと

- ① その性格：会員の考え、会費、労力、時間の**持ち寄り**によって仕事が**まとまる**。その成果を会員や図書館の利用者、設置者、その他の人々と**分け合う**。
⇒ それによって図書館が社会に定着するよう努力し、世界の図書館網の発展に寄与する。
- ② その基本は、図書館員のサービスと運営の能力。先ず利用者から信頼され、社会から重んじられ、設置母体も認めざるを得ないような力を持つ必要がある。この意味で、司書資格の認定者は利用者であって、単位の認定から得られるものではない。
- ③ 図書館協会の基本的役割は、そういう力を持った人を育てることではないか。
- ④ そこで、日図協学校の夢を語りたい。この名称は図問研学校の前例から。

4-2 そのイメージ

- ① 講師も受講者もボランティア、受講料無料、受講者には実務経験を求めたい。
- ② 図書館とは何か、について、組織的に考える機会を作る。例えば古典を読むこと。資料が十分にあれば、実際の図書館計画の再検討でもよいであろう。受講生は与えられた読書課題を読み、それについての意見を発表し、討論をする。講師も受講者も、ここで「考える」ことを目的とする。「教える」のではない。
- ③ その結果を、それぞれがレポートとしてまとめる。それが協会の資格認定のルートにのればそれに越したことはないが、当面は自分の充実を目的とする。
- ④ 講師は、この分野又は関連分野で何かをやり遂げた人で、それを次の世代の図書館人と分け合う意思と時間を持つ人。
- ⑤ 週に一回、3時間でふたこま、15週をひとまとまりとする。

4-3 学ぶ姿勢：朱子（朱熹 1130~1200）の「白鹿洞書院揭示」の一節

博学之、審問之、慎思之、明弁之、右為学之序、学問思弁四者所以窮理也

これを博く学び、つまびらかにこれを問ひ、慎んでこれを思ひ、明らかにこれをわきまえる。右は学を為すの序たり。学、問、思、弁の四者は、理を極むるのゆえんなり。（自分の学問の主題を広く学び、分からないところは詳しく考え、心を尽くしてそのことを思ひ、はっきりと判断をする。これが学問のいとぐちである。学と問と思と弁とは、物事の筋道を突き止める方法なのである）。若いときから、何か一つ、こういう分野を持ちたい。

4-4 「日図協学校」が成立してもしなくても、われわれがモットーとしたい言葉

私は、アメリカやイギリスの児童図書館をまわった時、… 国家の公共図書館にたいする無理解、図書館の不足、国語国字問題についてなど、苦情をならべ、なげいてみせたものでした。… そういう時、外国の児童図書館員たちが示す反応は、私をかなりおどろかせました。かの女たち— … —は、目をかがやかして、「ちっとも知らなかった。**How exciting! How challenging!**」というようなことばを発するのです。（『子どもの図書館』 石井桃子著 岩波新書 559, p.188~189.）

⇒ 司書職制度が確立せず、いつまで図書館にいるか分からない状況の中で、これをモットーに、というのは苛酷かもしれない。しかし、自分の道を開くのは、自分だ、ということ。